

神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ

—後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その7—

縄文時代研究プロジェクトチーム

1. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームでは、平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相についての研究を行っており、今年度で7年次目を迎える。これまでに、報告書を中心とした文献収集、基礎的なデータベース作成、研究略史、主要遺跡地名表・参考文献の作成、編年案構築に向けた一括出土事例（層位的出土事例を含む）の検討、堀之内1式土器・堀之内2式土器の編年案作成、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の分布図作成、堀之内1式土器編年案・堀之内2式土器編年案にもとづいた住居址のデーターシート作成、時期毎に主要な住居址形態を抽出した集成図作成等の研究活動を行ってきた。

今年度は、昨年度に作成した該期住居址のデーターシートから各段階の住居址数（遺跡の分布状況）、平面形態・張出部形態、平面規模、支柱穴配置・壁下構造・建替・拡張、炉址、埋甕、敷石・その他付帯施設等の諸要素を抽出し検討を行うこととした。なお、今回検討を行うにあたり対象とした各住居の帰属時期について再度報告書を確認し時期変更した住居址もあった。時期区分は、堀之内1式期（称名寺～堀之内、堀之内1式最終などを含む）、堀之内2式期（堀之内1式～堀之内2式、堀之内式最終末～加曽利B1式を含む）、後期前葉（後期、不明等含む）とした。また、住居軒数や建替・拡張その他諸要素については、各報告書の記載内容に従って住居址のデーターシートから抽出した。（岡）

2. 遺跡の分布状況（第1図、第1表）

ここでは神奈川県内における後期前葉の主要な集落遺跡の分布を概観する。

第1図は、『研究紀要15・19』に掲載した「主要遺跡地名表」、「主要遺跡地名表（補遺）」をもとに、該期の主だった集落址を地形図にプロットしたものである。掲載した該期の176遺跡のうち堅穴住居址が発掘調査された遺跡は68遺跡である。市町村別に見ると、横浜市に所在する遺跡が23遺跡と卓越し、全体の1/3を占める。以下、相模原市所在が8遺跡、清川村所在が6遺跡、伊勢原市所在が5遺跡とつづく。県内では、これらの遺跡から337軒の堅穴住居址が調査されている。

多摩川・鶴見川水系に挟まれた区域には、多摩丘陵とその南東縁に派生した下末吉台地が展開している。かかる地域の遺跡密集度は極めて高く、28箇所の集落遺跡が確認され、確実なものだけでも、201軒の堅穴住居址が検出されている。また、帷子峯遺跡、華蔵台遺跡、川和向原遺跡、小丸遺跡、矢崎山西遺跡、華蔵台南遺跡、山田大塚遺跡で堅穴住居址が10軒以上発見され、この時期の規模の大きな集落が集中することも特筆され、該期の県内における中核的な地域といえよう。

相模川水系周辺では、20遺跡で61軒が見つかり、相模原市所在の田名塩田・西山遺跡、はじめ沢下遺跡などの左岸域に展開する相模野台地上に立地する数軒の堅穴住居址からなる遺跡を中心に分布する。中でも大山山麓に位置する下北原遺跡では、中期後葉から後期後半まで連続する大規模集落が見つかり、

この地域の中心的集落として注目される。また、宮ヶ瀬ダム関連で調査された清川村に所在するナラサス遺跡や馬場遺跡などからも発見されており、丹沢山塊を取り巻く丘陵上にも遺跡が分布する。

平塚市・秦野市・伊勢原市を中心とする金目川水系周辺域では、11遺跡で47軒が見つかり、秦野市曾屋吹上遺跡、太岳院遺跡、伊勢原市子易・大坪遺跡などで、配石遺構を伴う集落が発見され注目される。また、伊勢原台地とその北縁に展開する上粕屋扇状地では、近年の大規模道路建設に伴い、新たな発見が続いており、今後その成果が注目される。

酒匂川水系周辺域は、これまでの調査例は少ないが、周辺の森戸川流域の小田原市曾我谷津岩本遺跡などで敷石住居址から構成される遺跡が見つかり注目される。今後、早川流域の御組長屋遺跡などとともに、箱根山地東縁に展開する丘陵を中心とする一帯が、県西部における中核地の1つになる可能性も十分あろう。

上述のごとく、該期の集落遺跡の分布状況は、これまでは多摩川・鶴見川水系流域を中心とした県北東部における集中的な分布が看取されてきたが、今後は、相模川水系や金目川水系を中心とした丹沢山塊東縁から南縁部における山地から丘陵、台地に見られる特色のある遺跡の分布にも注視していくことが必要であろう。（村松）

第1表 神奈川県内の後期前葉の住居址の動向（％は水系別の推移）

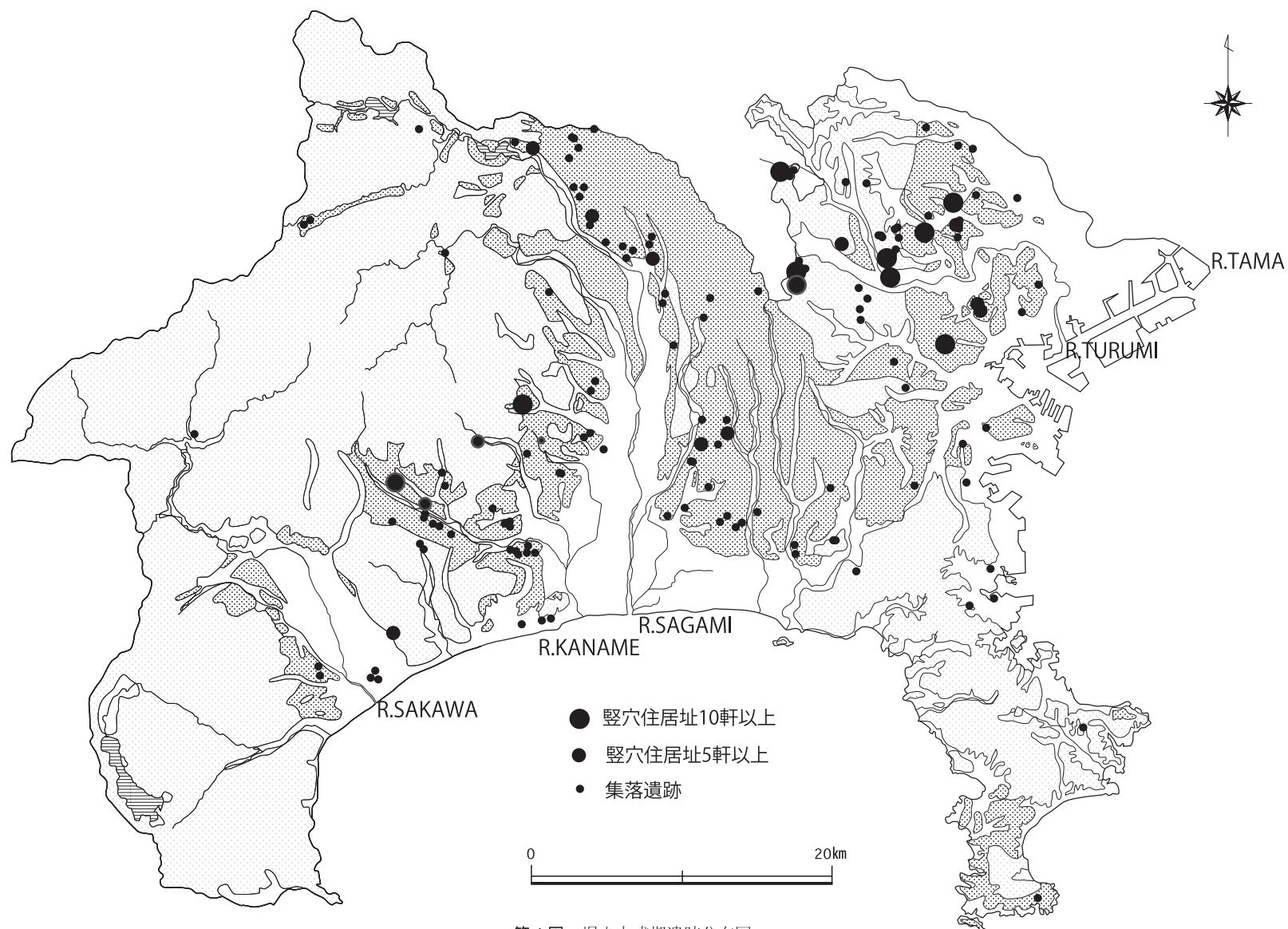
（単位：軒）

	多摩川・鶴見川水系	相模川水系	金目川水系	酒匂川水系	その他	合 計
堀之内1式	109	46	18	2	9	184
堀之内2式	68	12	9	1	8	98
後期前葉	24	4	22	0	5	55
合計	201 (60%)	62 (18%)	49 (14.5%)	3 (1%)	22 (6.5%)	337 (100%)

3. 平面形態・張出部形態（第2・3図、第2・3表）

ここでは、堀之内式期の住居址337軒における主体部平面形態および張出部形態の形態分類（類型化）とその時期的・地域的分布について分析する。まず主体部平面形態について見てみると、円形・楕円形（円形基調、A類型）145軒、方形・隅丸方形（方形基調、B類型）16軒、柄鏡形（C類型）129基、不明・その他47基となり、円形基調および柄鏡形住居が主体を占めることが分かる。ただし、円形基調および方形基調の住居址は、報告書に掲載された実際の平面図を見てみると、柄鏡形住居が含まれている場合も少なくないため、今回は詳細な分析対象からは外している。ここでは、主体部平面形態と張出部形態の組み合わせを把握しやすい柄鏡形住居を中心に検討した。

柄鏡形住居は主体部平面形態で3類（円形基調、方形基調、不明・その他）に分類し、さらに張出部形態で4類（方形・半円形基調、ハの字に開く形態・180度を開く形態、不明・その他）に分類し、それらの組み合わせで6類型（C-1～C-6類）に細別した。なお、形態分類の基準は、前年度に刊行された『研究紀要』20を参考にしているが、報告書の記載だけでは判断できないものがあまりに多く、筆者が実際に図面を見て、柱穴配置をベースに主観的・感覚的に分類した。特に、円形基調・方形基調の判断や、張出部形態におけるハの字・180度を開くなどの分別は曖昧な部分が多い。



第1図 堀之内式期遺跡分布図

柄鏡形住居129軒のうち、不明・その他を除いて類型化できたものは87軒であった。C-1類（主体部円形＋張出部方形・半円形）35軒、C-2類（主体部円形＋張出部ハの字）15軒、C-3類（主体部円形＋張出部180度）11軒、C-4類（主体部方形＋張出部方形・半円形）4軒、C-5類（主体部方形＋張出部ハの字）6軒、C-6類（主体部方形＋張出部180度）16軒となる。堀之内式期の竪穴住居址は、柄鏡形住居を含め基本的には円形基調が主体であり、方形基調は少数派である。張出部形態のみで見ると、堀之内式期以前からの伝統を引く方形・半円形基調のものが最も多く、次いで180度を開く形態が多い。

次に時期的分布についてまとめると（第2表参照）、円形・楕円形（円形基調）の住居址は145軒のうち堀之内1式期85軒、堀之内2式期31軒、不明（堀之内1式～2式等）29軒となり、方形・隅丸方形（方形基調）の住居址は16軒のうち、堀之内1式期9軒、堀之内2式期4軒、不明3軒となる。柄鏡形住居で見てもC-1類では36軒のうち堀之内1式期25軒、堀之内2式期8軒、不明3軒、C-2類では15軒のうち堀之内1式期12軒、堀之内2式期2軒、不明1軒、C-3類では11軒のうち堀之内1式期8軒、堀之内2式期1軒、不明2軒、C-4類は4軒すべてが堀之内1式期、C-5類は6軒のうち堀之内1式期3軒、堀之内2式期3軒、C-6類では16軒のうち堀之内1式期5軒、堀之内2式期9軒、不明2軒となり、基本的には堀之内1式期が主体である。ただし、C-6類では絶対数が少ないが、堀之内2式期が最も多く、柄鏡形住居全体で見ても、主体部方形基調の36軒のうち、堀之内1式期は12軒、堀之内2式期12軒と拮抗するようになる。また、張出部形態でも180度を開く形態になるにつれて堀之内2式期の住居が増えていくように見える。判然とはしないが、柄鏡形住居の主体部は円形基調から方形基調へ、張出部は方形・半円形から180度を開く形態へと漸移的に変遷していることが窺える。

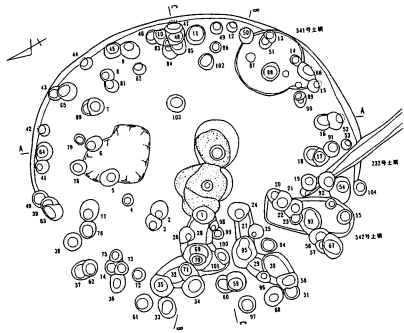
さらに地域的分布についてまとめると（第3表参照）、多摩川・鶴見川水系が他を圧倒しているが、C-1類型およびC-4類型では相模川水系が最も多く、これは張出部形態（方形・半円形基調）の地域性を反映していると考えられる。同様に、C-3類型およびC-6類型は多摩川・鶴見川水系（特に横浜市区）で占められており、張出部形態（180度を開く形態）によって地域性が窺える結果となった。（野坂）

第2表 住居類型の時期的分布

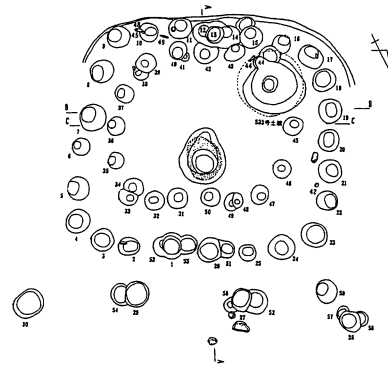
時期別	A類型	B類型	C-1 類型	C-2 類型	C-3 類型	C-4 類型	C-5 類型	C-6 類型	不明・ その他	合計
堀之内1式	85	9	25	12	8	4	3	5	33	184
堀之内2式	31	4	8	2	1	0	3	9	40	98
後期前葉	29	3	3	1	2	0	0	2	15	55
合計	145	16	36	15	11	4	6	16	88	337

第3表 住居類型の地域的分布

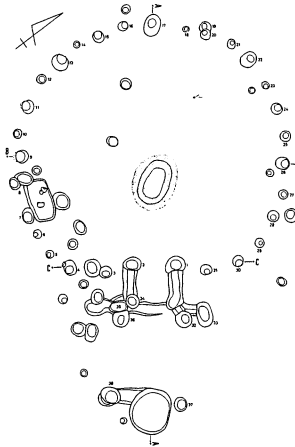
地域別	A類型	B類型	C-1 類型	C-2 類型	C-3 類型	C-4 類型	C-5 類型	C-6 類型	不明・ その他	合計
多摩川・鶴 見川水系	99	8	10	9	11	1	4	13	46	201
相模川水系	12	2	17	2	0	3	1	3	22	62
金目川水系	22	5	5	2	0	0	1	0	14	49
酒匂川水系	2	0	1	0	0	0	0	0	0	3
その他	10	1	3	2	0	0	0	0	6	22
合計	145	16	36	15	11	4	6	16	88	337



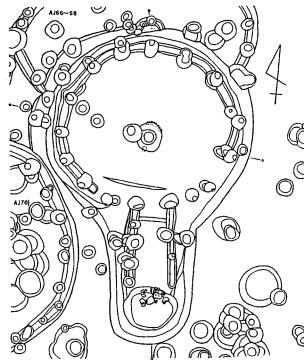
1 (A類型、川和尚原遺跡)



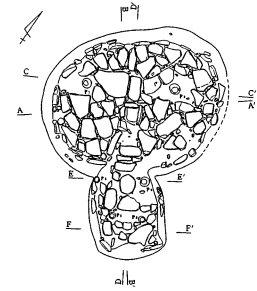
2 (B類型、川和尚原遺跡)



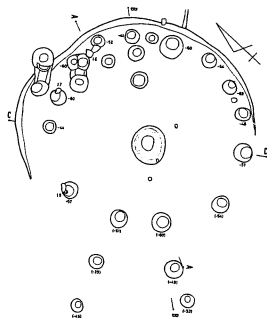
3 (C-1 類型、山田大塚遺跡)



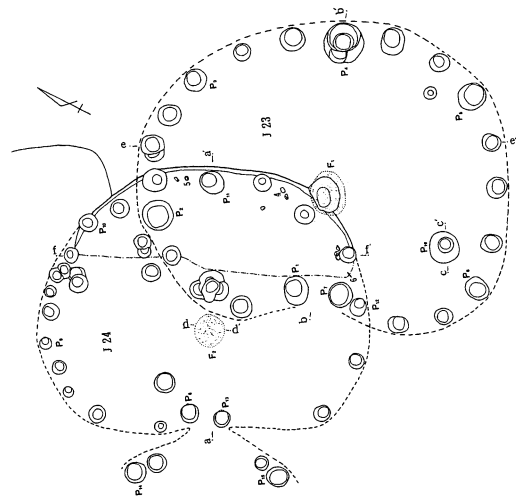
4 (C-1 類型、三の丸遺跡)



5 (C-1 類型、ナラサス遺跡)

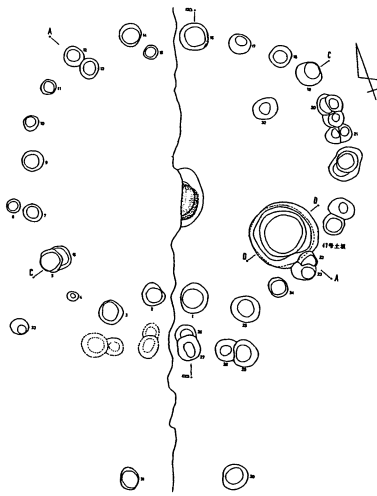


6 (C-2 類型、山田大塚遺跡)

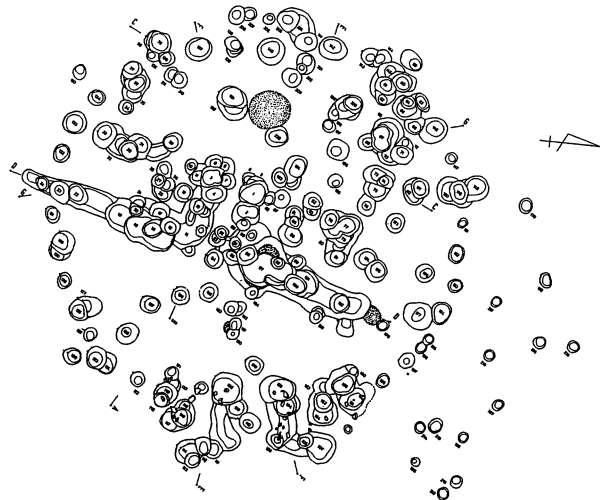


7 (C-2 類型、西ノ谷貝塚)

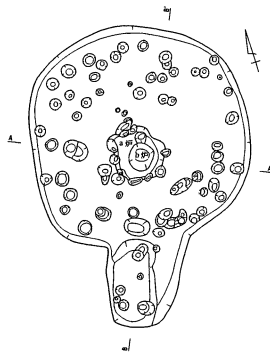
第2図 堀之内式期の住居址（平面形態・張出部形態類型①、S=1/150）



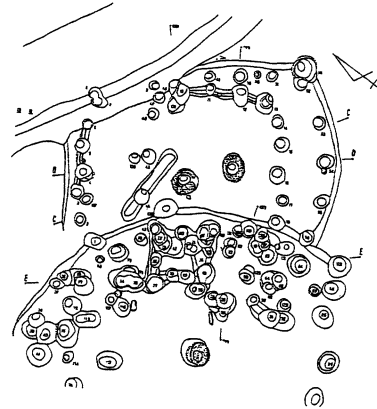
8 (C-3 類型、山田大塚遺跡)



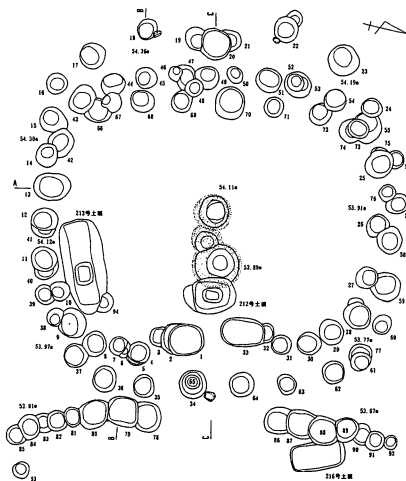
9 (C-3 類型、山田大塚遺跡)



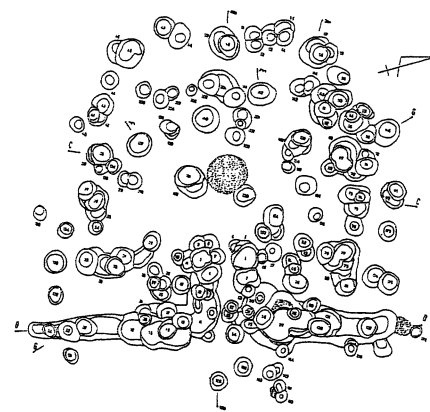
10 (C-4 類型、東谷戸遺跡 B 地区)



11 (C-5 類型、山田大塚遺跡)



12 (C-6 類型、川和尚原遺跡)



13 (C-6 類型、月出松遺跡)

第3図 堀之内式期の住居址（平面形態・張出部形態類型②、S=1/150）

4. 住居址規模（第4表）

過年度に実施した集成作業において176の該期遺跡を抽出したが、うち68遺跡において竪穴住居址、柄鏡形住居址が発見されており、その総数は337軒を数える。今年度は、これら337軒の住居址を対象として、帰属時期、平面形態、規模、柱穴、炉址、付帯施設等の属性についてデータベースを作成しているが、ここでは、住居址規模についての集計結果を提示し、主に主体部規模について分析を加えてみる。

「住居規模」の集計作業にあたっては、主体部から張出部までが遺存し、少なくとも主体部主軸側、副軸側の双方で最大値の計測が可能なるものを対象としたが、該期の住居址は柱穴のみが検出されている事例が少なからず存在し、また、遺跡立地面の志向性によるものか、特に柄鏡形住居址において張出部の痕跡が不明瞭なものも多く、上記条件を満たす住居址は、竪穴住居址1軒、柄鏡形住居址10軒と、該期住居址全体の約3.3%に過ぎない。大多数の住居址が集計対象から外れてしまう結果となってしまったため、別の切り口での数値集計を検討した結果、竪穴状をなす掘方の有無にかかわらず規模データの集計が可能であることから、主に「主体部柱穴外縁長（主軸長）」（以下外縁長）、「主体部柱穴外縁幅（副軸長）」（以下外縁幅）、「張出部柱穴外縁長」、「張出部柱穴外縁幅」という4つの項目を用いて分析を行うこととした。集計の対象となる住居址は、全体の約26.4%にあたる89軒（堀之内1式期：54軒・堀之内2式期：35軒）である。

主体部に配された柱穴の外縁長、外縁幅が計測可能であった住居址は87軒存在する。外縁長は2.4m～8.6mの間に遍在し、5m台が25軒と最も多く、次いで4m台が22軒、6m台が11軒、3m台が10軒、7m台が8軒、8m台が6軒、2m台が5軒となっている。外縁幅は2.8～9.5mの間に遍在し、5m台が24軒と最も多く、次いで6m台が20軒、4m台・7m台が各13軒、8m台が7軒、3m台が6軒、2m台が3軒、9m台が1軒となっている。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.12で、主軸長を副軸長が凌駕するという明確な傾向が捉えられる。以下、時期別、平面形態別（竪穴住居址・柄鏡形住居址）にみてる。

①竪穴住居址 集計作業の対象となる堀之内1式期の竪穴住居址は13軒存在する。外縁長は4.0m～8.6m、外縁幅は4.3m～9.5mの間に遍在し、外縁長のピークは8m台（5軒）、外縁幅のピークも8m台（4軒）となっている。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.01で、一見、円形あるいは方形基調のものが主体を占めるようにもみえるが、実際は主軸長が勝るものが4軒、副軸長が勝るものが7軒と、バラエティに富む。堀之内2式期の竪穴住居址は7軒が対象となる。外縁長、外縁幅とも4m台から8m台の各領域に満遍なく偏在しているが、際だったピークは認められない。数値的には1式期に比べやや小ぶりになるように見受けられるが、対象住居址数が少ないため明確な傾向とは言い難い。一方、外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.11で、副軸長が主軸長を凌駕するという明確な傾向が確認できた。

②柄鏡形住居址 集計作業の対象となる堀之内1式期の柄鏡形住居址は39軒存在する。主体部柱穴の外縁長は2.4m～7.5m、外縁幅は2.9m～8.3mの間に遍在し、外縁長のピークは5m台（15軒）、外縁幅のピークは6m台（10軒）である。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.15で、39軒の住居址すべてで副軸長が主軸長を凌駕することが確認された。堀之内2式期の柄鏡形住居址は28軒存在する。主体部柱穴の外縁長は2.45m～7.9m、外縁幅は2.8m～7.5mの間に遍在し、外縁長のピークは4m台（9軒）、外縁幅のピークは5m台（12軒）である。外縁長、外縁幅の平均値から算出される長幅比は約1:1.15で、主軸長が勝る住居址が4軒存在するものの、副軸長の卓越傾向は1式期から引き続き顕著な傾向として認識できる。竪穴住居址の集計結果とは異なり、外縁長、外縁幅とも平均値は2式期のものが勝っており、張出部の拡幅が拡大する傾向と共に、2式期の柄鏡形住居址の特徴のひとつとして捉えておきたい。（井辺）

第4表 堀之内式期住居址規模集計表

①－1 堀之内式期住居址（89軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	6.80	7.70	8.60	9.50	6.20	4.85	4.00	10.10
最小値	2.60	2.10	2.10	2.40	2.80	1.35	1.00	0.84	0.80
平均値	5.77	4.21	5.14	5.26	5.88	2.48	2.09	1.86	3.90
集計対象軒数	14	20	30	87	87	13	15	63	61

①－2 堀之内1式期住居址（54軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	5.80	7.40	8.60	9.50	6.20	4.85	4.00	8.30
最小値	2.60	2.10	2.10	2.40	2.90	1.35	1.00	0.85	0.90
平均値	5.76	3.96	4.91	5.31	5.87	2.49	2.08	1.92	2.98
集計対象軒数	12	14	21	52	52	11	13	36	36

①－3 堀之内2式期住居址（35軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	7.10	6.80	7.70	8.20	8.65	3.30	3.00	3.30	10.10
最小値	4.60	2.65	3.10	2.45	2.80	1.50	1.30	0.84	0.80
平均値	5.85	4.81	5.66	5.17	5.89	2.40	2.15	1.79	5.23
集計対象軒数	2	6	9	35	35	2	2	27	25

②－1 堀之内式期竪穴住居址（21軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	2.60	2.60	5.90	8.60	9.50				
最小値			2.10	4.00	4.30				
平均値	2.60	2.60	4.00	6.74	7.04				
集計対象軒数	1	1	2	20	20				

②－2 堀之内1式期竪穴住居址（14軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	2.60	2.60	2.10	8.60	9.50				
最小値				4.00	4.30				
平均値	2.60	2.60	2.10	7.00	7.08				
集計対象軒数	1	1	1	13	13				

②－3 堀之内2式期竪穴住居址（7軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値		4.60	5.90	8.20	8.65				
最小値				4.60	5.30				
平均値		4.60	5.90	6.26	6.96				
集計対象軒数		1	1	7	7				

③－1 堀之内式期柄鏡形住居址（68軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	6.80	7.70	7.90	8.30	6.20	4.85	4.00	10.10
最小値	3.80	2.10	2.80	2.40	2.80	1.35	1.00	0.84	0.80
平均値	6.02	4.30	5.22	4.81	5.53	2.48	2.09	1.86	3.90
集計対象軒数	13	19	28	67	67	13	15	63	61

③－2 堀之内1式期柄鏡形住居址（40軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	9.20	5.80	7.40	7.50	8.30	6.20	4.85	4.00	8.30
最小値	3.80	2.10	2.80	2.40	2.90	1.35	1.00	0.85	0.90
平均値	6.05	4.05	5.06	4.75	5.47	2.49	2.08	1.92	2.98
集計対象軒数	11	13	20	39	39	11	13	36	36

③－3 堀之内2式期柄鏡形住居址（28軒）

	全長	主体部 掘方長	主体部 掘方幅	主体部柱穴 外縁長	主体部柱穴 外縁幅	張出部 掘方長	張出部 掘方幅	張出部柱穴 外縁長	張出部柱穴 外縁幅
最大値	7.10	6.80	7.70	7.90	7.50	3.30	3.00	3.30	10.10
最小値	4.60	2.65	3.10	2.45	2.80	1.50	1.30	0.84	0.80
平均値	5.85	4.81	5.63	4.90	5.62	2.40	2.15	1.79	5.23
集計対象軒数	2	6	8	28	28	2	2	27	25

5. 主柱穴・壁柱穴・壁溝・壁外柱・建替・重複（第4図）

ここでは、主柱穴・壁柱穴・壁溝などの住居に付帯する施設と、住居そのものの建替・重複事例を扱う。

主柱穴：上屋を支える主柱が認められず、壁際に廻らされた壁柱が上屋を支える構造は、前段階の称名寺式から引き続き本段階でも維持される。管見の337例中、主柱穴が認められ、上屋を主柱が支える構造が想定されたのは華蔵台遺跡の35号住居址（堀之内2式新段階）の1例のみであった。35号住居址は径が8～10mある比較的大型の住居址であるが、当該期は同程度の規模の住居址にあっても主柱穴が認められないのが通常である。華蔵台遺跡35号住居址の主柱穴は、大きな上屋の支点間を支える構造上の必要から設けられたと考えるより、続く加曽利b式以降にむけた住居上屋構造の変化を示すもので、同住居址は時期的にもその画期に位置している可能性がある。

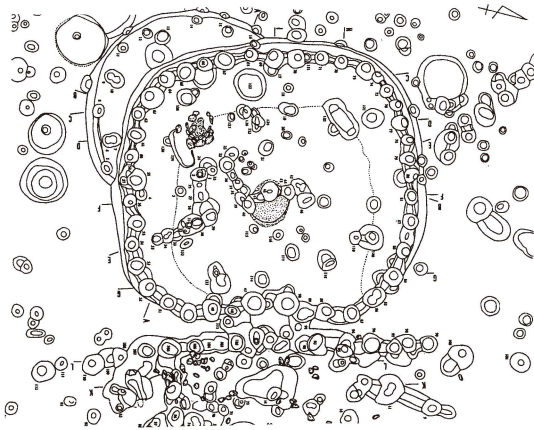
壁柱穴・壁溝：上述のように当該期においては壁際に壁柱穴を廻らすのが一般的形状である。壁溝は田名塩田・西山遺跡3号住居址の1例を例外とし、華蔵台遺跡35号住居址、小丸遺跡12・13号住居址、華蔵台南遺跡9号住居址、山田大塚遺跡21号住居址などに、壁柱間を結ぶ補助的な使用が散見されるにとどまる。

壁外柱穴：当該期の住居址に壁柱穴列の外側に壁外柱穴の存在が指摘されることがある。主柱や壁柱とともに上屋を支える構造の一部と想定される施設であるが、しかしながら実際の集成にあたっては後述する「建替」や「重複」の痕跡との区別が難しく、管見の中では表の屋敷（No.8）遺跡J2号の1例のみがあげられる。

建替・重複：住居の建替えや重複と認識される事象は、当該期の住居址に顕著に観察される。一口に「建替」「重複」といっても、壁柱穴が同心円状に重なり、住居の「拡張」や「建替」と認識される状況でも、実際には住居営為の断絶期間をはさんだ異なる住居の「重複」の可能性がある、逆に住居址同士が部分的に重なって構築された一般に「重複」と認識される状況であっても、実際の行為としては住居営為が連続する「建替」であった可能性が残るなど、実際の行為としての両者の峻別は容易ではない。ここではあくまで遺構に観察される事象の捉え方として、複数基の柱穴に建替えの痕跡があるもの、同心円状に壁柱穴列がめぐるものを「建替」と呼称し、別の住居址が重なっているもの、あるいは大部分が重なっているが重なっていない部分があるものを「重複」と呼称することとする。また住居同士は完全に重なってはいるが、炉址を共有せず面積やプラン・主軸が著しく異なるもの、床面にレベル差が認められるものは「重複」と捉えることとした。なお実際の行為としてばかりではなく、残された遺構としても両者を区別しがたい事例は多く存在し、1軒の「建替」と認識するか、複数軒の「重複」と認識するかは調査・報告者によってまちまちで、当該期の住居址数を把握することを困難にしている。事例の計上にあたっては、便宜上「建替」はすべて1軒、「重複」を複数軒として捉えた。両者の峻別は、上記の基準により筆者が行ったため、その数を含め報告書の数値とは必ずしも一致していない。今回集成した資料のうち観察に耐えうる資料が337例、このうち上記の「建替」が観察された資料が30例、「重複」が観察された資料が80例あった。実に全体の3割の住居址に「建替」「重複」の痕跡が残されていたことになる。その居住行為が継続的か断続的かはとりあえず置くとしても、「建替」や「重複」といった累積的・重畳的な住居営為の痕跡は、発見された住居址数の著しい増加や規模の大きな集落遺跡の出現と軌を一にする事象であり、当該段階での集落の定着性・安定性の高まりと関連するとしてよいだろう。また一方で、単に「建替」や「重複」の痕跡が多いばかりではなく、これら「建替」・「重複」住居址は集落遺跡内の特定箇所集中している傾向を指摘できる。例えば川和向原遺跡では5号住居址（建替）と8号住居址（建替）が重複し、さらにこれに近接して9・10号住居址の重複が見られ、また7号住居址（建替）に近接して14・15号住居址が重複する。華蔵台南遺跡では12号住居址（建替）・13号住居址・

14号住居址がほぼ同一箇所重複し、これに近接して15号住居址（建替）と17号住居址が重複するなど、竪穴住居址が同じ占地を取り続ける状況が看取され、「建替」と「重複」が、住居営為の反復という同一線上の行動であったと位置づけることができる。また同様の同一箇所にこだわった住居址の累積は集落規模が比較的大きな横浜市域に代表される東京湾側の地域だけではなく、田名塩田・西山遺跡をはじめ沢下遺跡、子易・大坪遺跡など、県域全体に認められることを付記しておきたい。このような同一占地への強いこだわりは石井寛が集落遺跡における「核家屋」（石井 1999）と呼称した多重複住居址の萌芽を思わせるものである。

（小川）



華蔵台遺跡 35号住居址：主柱穴・壁溝



表の上 (No. 6) 遺跡 J 2号敷石住居址：壁外柱穴



川和尚原遺跡（上14・15号住居址、7号住居址、下8号住居址、9・10号住居址）：建替・重複

第4図 堀之内式期の住居址（主柱穴・壁外柱・建替・重複、S=1/240）

6. 炉址（第5図、第5表）

本稿では、堀之内式期の可能性のある総数58遺跡、住居址283軒における278基の炉址を対象とする。時期不明のものを除き、堀之内式期を大まかに前後に二分すると、堀之内1式期に帰属するものは住居址159軒で炉153基を数え、堀之内2式期は住居址94軒で炉102基がある。炉の形態について埋甕炉、石囲埋甕炉、石囲炉、地床炉に分類する。炉の遺存状況により、形態が不明瞭なものもあるが、その可能性のあるものにそれぞれあてはめている。

まず、住居址における炉の位置では、それが判明するもの145基のいずれもが、住居址（柄鏡形住居の主体部）の中央から入口寄りに設けられ、時期的な変化は認められない。時期不明のものを除くと堀之内1式期の住居（主体部）中央43基、入口寄り44基、堀之内2式期では中央19基、入口寄り25基を数える。

形態毎の数として、総数278基中、埋甕炉8基、石囲埋甕炉7基、石囲炉62基、地床炉201基がある。堀之内1式期に限ると、153基中、埋甕炉5基、石囲埋甕炉5基、石囲炉27基、地床炉116基となる。一方、堀之内2式期における形態毎の数量は、102基中、埋甕炉2基、石囲埋甕炉2基、石囲炉19基、地床炉79基となる。いずれの時期も地床炉を主体に、ついで石囲炉が多く、埋甕炉と石囲埋甕炉がそれぞれ少数を占め、時間的な変化は確認できない。

石囲炉は、主として住居址における敷石の有無と相関があり、地域的な偏りがある。石囲炉を有する住居で敷石が施されるのは44基を数え、全石囲炉61基の71.1%に相当する。また、地床炉を有する住居址で敷石がないものは183基あり、全地床炉201基の91%を占める。一方で、敷石が施されるものの地床炉となる炉址18基（全地床炉の9.0%）、敷石が敷設されないものの石囲炉の形態をとるもの17基（全石囲炉の17.9%）がある。大まかに地床炉は住居の敷石と関連するものの、一定程度、敷石敷設と無関係に石囲炉もしくは地床炉となるものがある。

ついで、時期の判明している住居址（堀之内1式期158軒、堀之内2式期93軒）を対象に炉の平面規模を確認する。堀之内1式では、151基中、長径が0.7m未満のもの47基、0.7m以上1.0m未満のもの67基、1.0m以上37基となり、堀之内2式期では、101基中、長径0.7m未満40基、0.7m以上1.0m未満39基、1.0m以上22基となる。堀之内1式期は長径0.7m以上1.0m未満のものが主体であるのに対し、堀之内2式期に長径0.7m未満のものとはほぼ同数となり、新しくなるにつれ若干小型化する傾向にある。

炉の深さや形状に目を向けると、燃焼面の深さでは、堀之内1式期で燃焼面の深さが判明している68基のうち燃焼面最深部が0.3m未満のもの55基、0.3m以上0.6m未満のもの13基を数え、堀之内2式期では35基中0.3m未満のもの22基、0.3m以上0.6m未満のもの12基、0.6m以上のもの1基となり、わずかに深くなる傾向がある。炉の掘り方の深さでは、堀之内1式で掘り方の深さが判明している135基中、最深部が0.3m未満のもの49基、0.3m以上0.6m未満76基、0.6m以上0.9m未満9基、0.9m以上1基を数えるのに対し、堀之内2式期で掘り方の深さが判明している89基のうち0.3m未満のもの26基、0.3m以上0.6m未満38基、0.6m以上0.9m未満13基、0.9m以上12基となり、堀之内1式期に比べ深さを増している。これは、掘り方断面形がすり鉢状もしくは逆台形を呈するもののほかに、ほぼ中央にピット状の掘り込みを持つものの割合が増加しているためである。炉にピット状の掘り込みを持つものは、堀之内1式期の152基中19基（12.5%）、堀之内2式期の101基中25基（24.8%）があり、堀之内2式期に割合が増加する。このピット状の掘り込みを有する炉は掘り方の深さが0.4m以上で、深いものでは1.3mに達するものもある。割合増加の要因については今後の課題となろう。

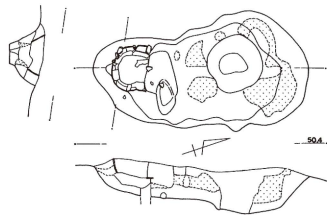
（阿部）

第5表 炉址形態別一覧表

	埋壺炉		石囲埋壺炉		石囲炉		地床炉		計	住居址総数
堀之内1式期	5	(3.3%)	5	(3.3%)	27	(17.6%)	116	(75.8%)	153	(100%)
堀之内2式期	2	(2.0%)	2	(2.0%)	19	(18.6%)	79	(77.5%)	102	(100.1%)
総数(前後の時期含む)	8	(2.9%)	7	(2.5%)	62	(22.3%)	201	(72.3%)	278	(100%)

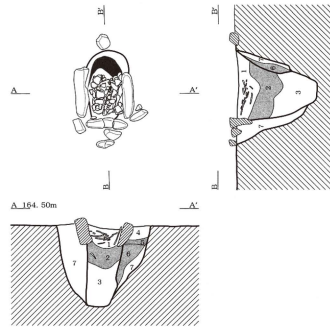
堀之内1式期

埋壺炉



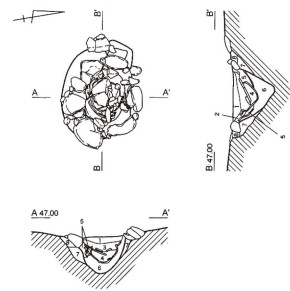
1. 岡上丸山J1A・B号竪穴住居住

石囲埋壺炉(断面ピット状)



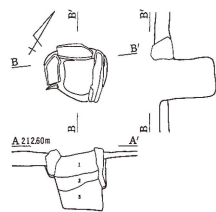
2. はじめ沢下J8号敷石住居

石囲埋壺炉



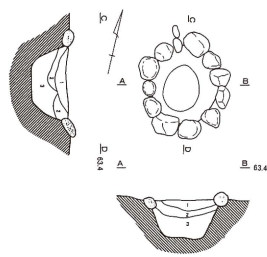
3. 曾我谷津岩本第1号住居

石囲炉(断面ピット状)



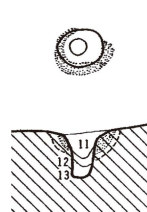
4. ナラサスJ1号敷石住居

石囲炉



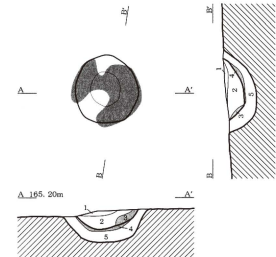
5. 田名塩田・西山第6号住居

地床炉(断面ピット状)



6. 華蔵台南8号住居

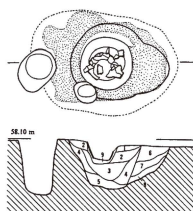
地床炉



7. はじめ沢下J3号敷石住居

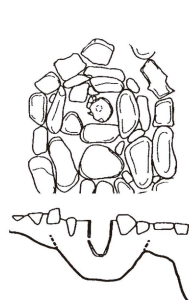
堀之内2式期

埋壺炉



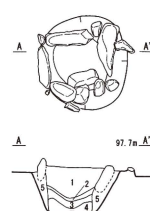
8. 小丸22号住居

石囲埋壺炉



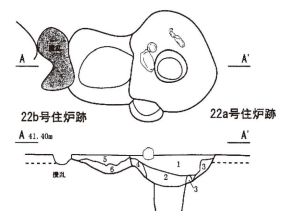
9. 太岳院92-5J1号敷石住居

石囲炉



10. 太岳院91-1J2号敷石住居

地床炉(断面ピット状)



11. 篠原大原北22号住居

第5図 主な炉址形態 [S=1/60]

7. 埋甕（第6図、第6表）

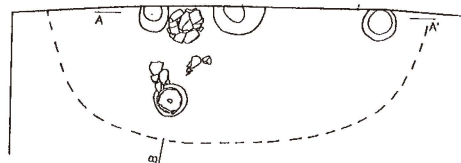
埋甕の数：埋甕を持つ住居址は15遺跡から15軒確認できた。また埋甕数は18個である。時期別に見ると堀之内1式期に多く、堀之内2式期に減少するようである。住居址内に埋設された埋甕数を見ると、第6表のように1個が一般的であったと考えられる。

埋甕の位置：堀之内1式期・2式期ともに床面上（第6図1）、壁際（同2）に埋甕を埋設する検出例に差異は見られないが、張出部（同3）に埋甕が埋設される検出例は堀之内1式期に10点確認されているが、堀之内2式期には確認されていない。張出部形態が長方形のものから「ハ」の字状にピットが配置された張出部形態に変化したことによるものと考えられる。

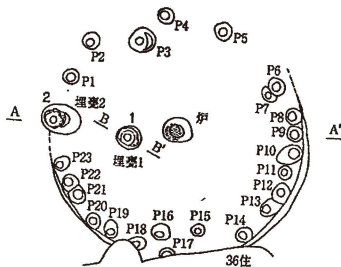
埋甕の埋設状態：埋甕の埋設状態は正位（第6図4）が圧倒的に多く、逆位は少ない。また、埋設状態不明とした埋甕の中には、浅い掘り込みに土器が横倒しに潰れた状態で埋設されていたもの（同5）、掘り込み内に1個体の土器片が纏まった状態で埋設されていたもの（同6）も発見されている。（岡）

第6表 埋甕の出土住居址軒数・位置別出土数・出土状況別出土数

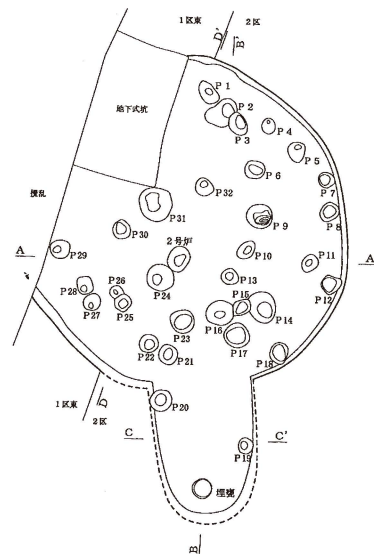
	埋甕出土点数別の住居址軒数			出土位置別の埋甕点数			出土状況別の埋甕点数		
	1個	2個	3個	床面	壁際	張出部	正位	逆位	不明
堀之内1式期	9	1	1	1	3	10	10		4
堀之内2式期	4			3	1		1	2	1



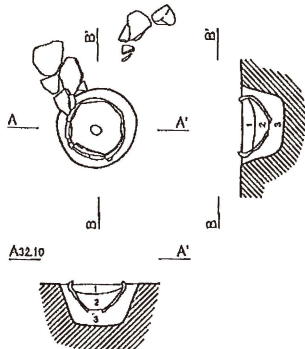
1. 久野北側下第IV地点 S I 03



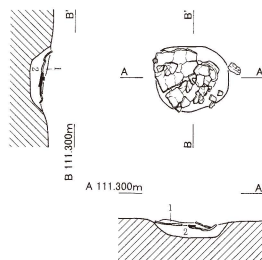
2. 矢崎山西42号居住址



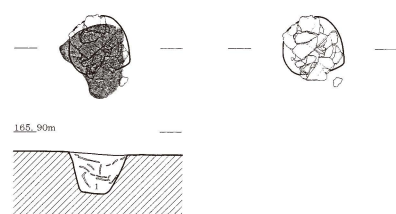
3. 西富岡・向畑 J 2号居住址



4. 久野北側下第IV地点 S I 03



5. 子易・大坪1区 J 4号居住址



6. はじめ沢下 J 1号敷石住居址

第6図 埋甕出土住居址 (S=1/120)・埋甕出土状況 (S=1/50)

8. 敷石・その他付帯施設（第7図）

ここでは、敷石及び付帯施設を取り扱う。敷石については、339軒のうち196軒（57%）に何らかの形で敷石とみられる礫の出土が確認でき、半数以上に礫を用いていると言える。しかしそのあり方は、覆土中に散在しているもの、床面に隙間無く敷き詰められているもの、一部限定的にしかれているものや散在するよう分布しているものなど多様性に富む状況である。また後世の攪乱などにより失われているものも多いと考えられ、意図的に一部のみに礫を配置しているものか、部分的に残存しているものなどか、一概に判断できないものも多く存在する。今回はこれらの状況を踏まえた上で、比較的良好な遺存状態であると考えられるものを対象に任意で選択し、その様相を捉えて行きたい。

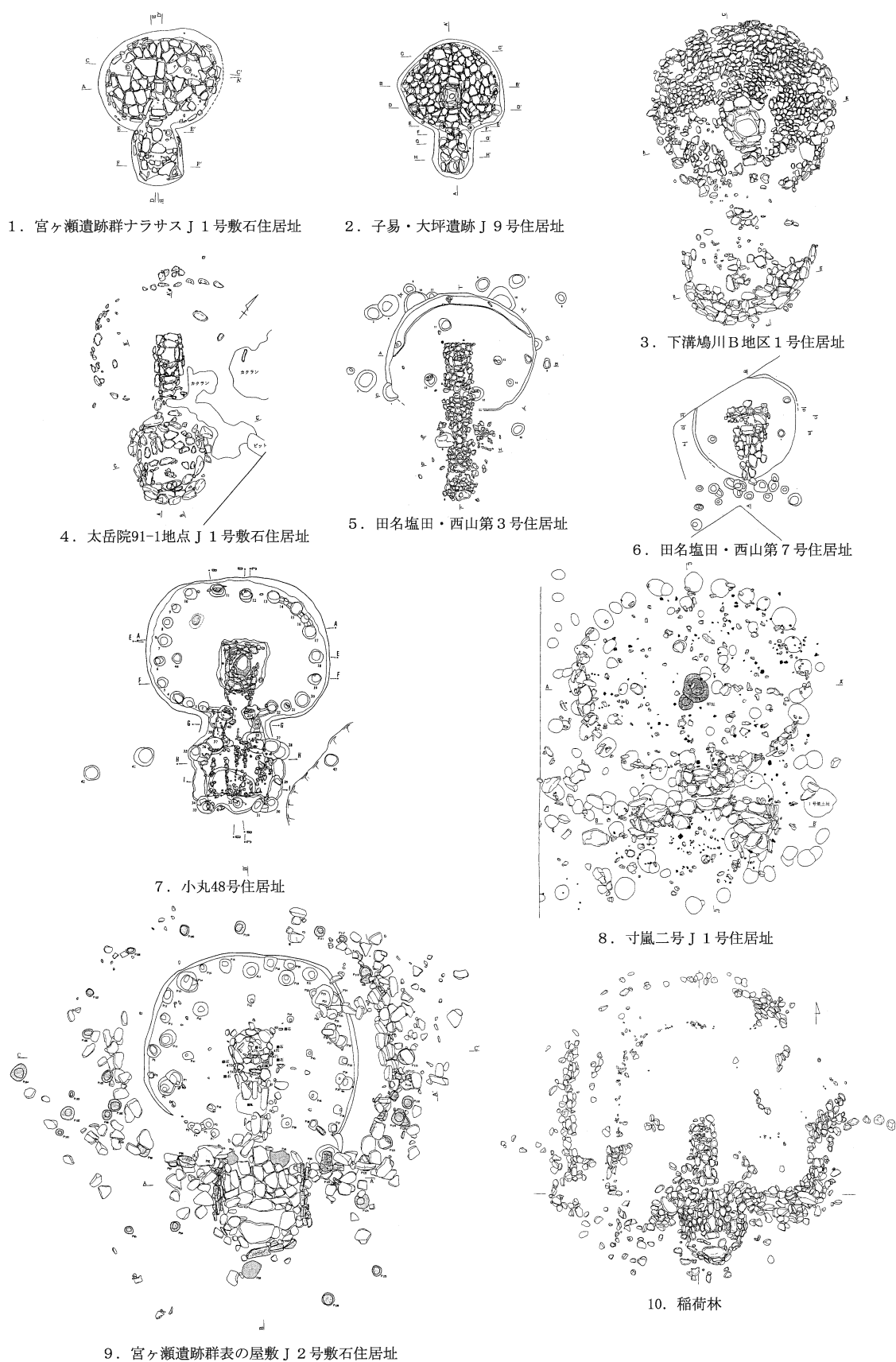
a 敷石が全面に敷き詰められているもの 明瞭な掘り込みを有し、ほぼ全面に敷石が敷き詰められているものは、宮ヶ瀬遺跡群ナラサスJ1号敷石住居址（第7図1）、子易・大坪遺跡3区J9号住居址（第7図2）などがある。いずれも主体部では壁に沿って縁石が立つよう並び、炉と張出部を結ぶ主軸には、比較的大きな礫が配置されている。張出部は長方形に近い形態で突出する。掘り込みは明瞭ではないが、全面に礫が敷き詰められているものは、下溝鳩川遺跡B地区1号住居址（第7図3）がある。主体部では縁石が立つように構築され、壁の存在が示唆される。張出部の端部は弧状に礫が配置されているが、主体部との接続部の礫は遺存してはおらず、後世の影響か否かは不明である。また比較的小型の礫を主体に用いられており、近郊河川の河床礫組成が反映されているものと考えられる。

b 炉から張出部周辺に礫が用いられるもの 大岳院遺跡91-1地点J1号敷石住居址（第7図4）、田名塩田・西山遺跡第3号住居址（第7図5）、第7号住居址（第7図6）がある。主体部は縁石もしくは掘り込みでその輪郭が比較明瞭に捉えられるが、敷石は炉及びその周囲で限定的に用いられ、平面的な広がり認められない。また大岳院遺跡（第7図4）・田名塩田・西山遺跡（第7図5）では、炉周囲から連続的に張出部にかけて顕著な敷石が配されている。田名塩田・西山遺跡（第7図6）では、炉周囲から張出部に向かって敷石が見られるが、張出部はピットのみである。これらの状況は、本来から限定的な敷石の使用であるのか、住居廃絶後に抜き取られ転用されたものか、後世に改変されて限定的な遺存となっているのか、明らかではない部分もあり、検討が必要である。

寸嵐J1号敷石住居址（第7図7）、小丸遺跡第48号住居址（第7図8）など、主体部及び張出部に部分的ではあるが敷石が用いられているものがある。柱穴配置も明瞭で、柱穴の直上に敷石が認められる部分も多く、柱穴配置と敷石との構造を考える上でも興味深い情報を提供している。

c 主体部の外側に敷石がめぐるもの 宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷J2号敷石住居址（第7図9）、稲荷林遺跡（第7図10）がある。宮ヶ瀬遺跡群（第7図9）では、明瞭な掘り込みを有する主体部の炉周囲と張出部に敷石が用いられ、主体部からやや間隔を空けて大型の敷石が取り囲むようめぐっている。稲荷林遺跡（第7図10）では、主体部の掘り込みは明瞭ではないが主体部付近には小型の礫を配した部分と同心円状に取り囲む大型の礫の敷石が見られ、宮ヶ瀬遺跡群（第7図9）と類似した様相を示している。

敷石の状況を主体に県内での事例を概観したが、調査によって住居全体の構造が明らかになっていることが前提とされ、さらに遺存状況や後世の改変などにより敷石の用いられ方の把握が困難であることも含めて、検討の余地は多い。また時期を見ると大岳院遺跡（第7図4）、稲荷林遺跡（第7図10）は、堀之内2式段階であるが、その他は概ね堀之内1式段階であり、時期的な変遷までは言及できない状況である。後期中葉期の様相を比較した上で、敷石に関わる傾向の把握など、今後の分析により言及していく必要がある。（天野）



第7図 堀之内式期住居址の敷石 (S=1/180)

神奈川県 後期堀之内式土器出土主要遺跡地名表（補遺）

- (1) この表は、「神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その５－」（縄文時代研究プロジェクトチーム 2014「かながわの考古学」『研究紀要』19 公益財団法人かながわ考古学財団）に掲載した、主要遺跡地名表（補遺）（文献目録）作成以降に刊行された報告書を中心に、神奈川県内における後期前葉期の主要遺跡を補遺としてまとめたものである。
- (2) 掲載遺跡の抽出基準及び表の様式は、「研究紀要」15を原則として踏襲している。
- (3) 文献の収集、データベースの作成、表の編集は、縄文時代研究プロジェクトチームが行った。

No.	遺跡名	所在地	文献No.
伊勢原市			
176	子易・大坪遺跡	伊勢原市子易	169
177	西富岡・向畑遺跡	伊勢原市西富岡	170
秦野市			
178	曾屋吹上遺跡	秦野市富士見町	171

文献目録（文献No.は表中文献No.と一致）

- 169 三瓶裕司・大塚健一ほか 2013 子易・大坪遺跡・子易・町屋裏遺跡 県道611（大山坂戸）道路改良事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告292（公財）かながわ考古学財団
- 170 諏訪間直子・岡 稔ほか 2014 西富岡・向畑遺跡Ⅰ 新東名高速道路（伊勢原市西富岡地区）建設事業に伴う発掘調査 かながわ考古学財団調査報告298（公財）かながわ考古学財団
- 171 高山純・佐々木博昭編 1975 曾屋吹上－配石遺構発掘調査報告書－〈図録篇〉